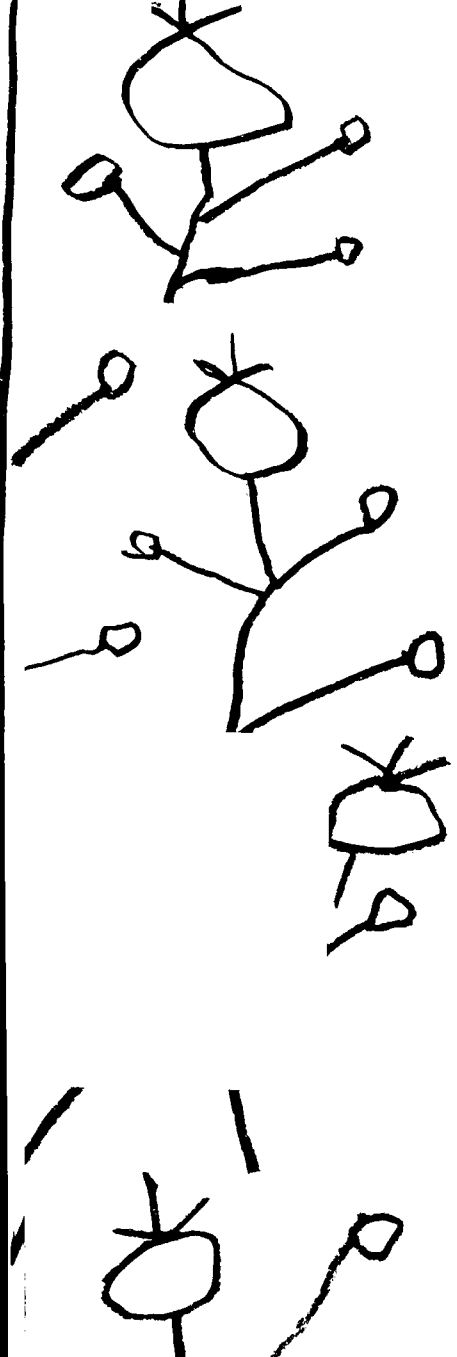
小島直記伝記文学全集

島崎藤村記念文学全集

第十二巻

中央公論社



小島直記伝記文学全集　第十二巻

定価　三四〇〇円

昭和六十二年　八　月　十　日印刷
昭和六十二年　八　月二十日発行

著　者　小島直記
発行者　嶋中鵬二
印刷者　杉浦　博
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替　東京二―三四
©一九八七　検印廃止
ISBN4-12-402592-0

小島直記伝記文学全集　第十二巻　目次

フリードリヒ・ライファイゼン　――ベルリンに背を向けた男

序　章　会議は踊る　9
第一章　春　32
第二章　七月革命　54
第三章　赤と黒　77
第四章　文学少年　100
第五章　十七歳　124
第六章　大学生　147
第七章　兵隊（ミリツス）　171
第八章　照る日曇る日　194
第九章　新米村長　217
第十章　初陣　241

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第十一章　花　264
第十二章　伴　侶　288
第十三章　農民対策　311
第十四章　パン組合　335
第十五章　三月革命　358
第十六章　トラブル　382
第十七章　牛　406
第十八章　爪　跡　429
第十九章　二つの終点　452
第二十章　掘り下げ　474
第二十一章　福祉組合　497
第二十二章　障　害　520
第二十三章　心の眼　543
あとがき　565

小島直記伝記文学全集

第十二巻

フリードリヒ・ライファイゼン

フリードリヒ・ライファイゼン

――ベルリンに背を向けた男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序　章　会議は踊る

一

ナポレオンをエルバ島に押しこめたのだから、二十年におよぶヨーロッパの戦火は消えた――と彼等は信じていた。

《彼等》とは、オーストリアの首都ウィーンにあつまった支配者たち、すなわち九十の王国、五十三の公国の主権者、外交使節、貴族たちだ。

この中には、二人の皇帝とその皇后たち、四人の王と一人の女王、二人の皇太子、二人の大公妃、三人のプリンスたちがいる。彼等の宿舎としては王宮が提供せられ、いずれも廷臣たちを引きつれてのりこんでいた。そのほか、各国の王族、貴族たちも、きらびやかな衣裳をまとって遊びに来ていた。連日連夜、宴会、舞踏会、狩猟会、観劇会がひらかれ、男たちは女たちを物色し、女たちは媚態を示し、数えきれぬほどの情事が重ねられていた。十字軍時代の貞操帯が廃止されて年久しいが、貞操が守られていたわけではない。

彼等がウィーンにあつまったのは会議のためであった。廃墟と荒廃の中から、新しいヨーロッパの秩序を打ち立てるのが目的である。ところが彼等が情熱をそそいだのは歓楽だ。会議ではな

くて祭典であった。
それを見て、
「ル・コングレス・ヌ・マルシュ・パ、メ・イル・ダンス！」
とつぶやいた男がいる。リーニュという公爵で、もはや八十に手のとどく前世紀の遺物だ。
「会議は進まず、ただ踊るだけ！」
うまい警句である。
だがおもしろいのは、この老人が眉をしかめて単なる傍観者、皮肉な観察者にならず、まっさきにその歓楽の泉に身をひたしたことだ。そして、老年も忘れてあまりにも多くの女性と深夜のランデブーをたのしんだため、まだ会議もおわらぬうちに発病、やがて臨終ということになった。
ところが、そのことをなげくどころか、青白い顔に最後の微笑をうかべ、消えるような声でつぶやいたのである。
「わしは、本望じゃわい。会議の景物に、金羊毛勲章の騎士の肩書をもつ陸軍元帥の葬式を見せつけてやれるのじゃからな……」

二

ところが、にぎやかなワルツの旋律のかげで、ひそかにことは運ばれていた。開会式もなく、総会もなかったが、海千山千の数人の男たちが、智謀のかぎりをつくして話しあいに入っていたのである。
ロシア皇帝、アレクサンドル一世、三十七歳。
プロイセン首相、ハルデンベルク、六十三歳。

イギリス外相、カスルレー、四十五歳。
イギリス軍司令官、ウェリントン、四十五歳。
そして、オーストリア首相、メッテルニヒ、四十一歳。
これら四大国の首脳たちによって、ヨーロッパ全体の地図が新しく塗られようとしていた。
だが、役者が一人足りない。それも端役、バイ・プレーヤーではなくて、主役、悲劇の主役である。
その男は、フランス外相、タレイラン、五十九歳。
ヨーロッパを荒しまわったフランス国の代表として、いわば《被告》の席に引きすえられ、これら四大国首脳が作成した判決文に頭を下げねばならぬ役割である。
だがタレイランは、その役割に不満であった。
敗戦国代表として首の座につくような、そんな台本に用はない。《ヨーロッパ列国会議》の名のもとに押しつけられる役割を修正し、変更するため、彼もまた智謀のかぎりをつくして、パリで考えていた。
ウィーン到着がおくれたのもそのためだ。
「フランスの立場の困難さは、異常なものだった」と、タレイランは回想録に書きつけている。「従来永くフランスに敵対していた諸国の政府は、ともすればフランスをヨーロッパの主要な問題から除外しようとしていた。また、事実、彼等はきわめてたやすくそうできる地位にあったのである。なるほど、パリ条約によってフランスは破滅をまぬがれた。しかしながらわが国は、ヨーロッパ全体の政治体制において、当然占めるべき地位を回復するまでにいたらなかった。若干の主要国の代表たちが、なんとかしてフランスを第二流の地位に転落させたいという内心の願望

をいだいていたことを、訓練された眼ならば、容易に看破できたはずである」
タレイランは、フランスを一流大国の地位に引きもどしたい、と考えていた。
つまり被告として、うなだれて判決を受けにいくのではない。《四大国》を《五大国》とさせ、対等――いや、むしろリーダーとして、ヨーロッパ料理のチーフ・コックとならねばならぬ。
彼は、外務大臣として、会議にのぞむ使節すなわち自分自身に、《訓令》を書いた。
当時のヨーロッパにおけるあらゆる問題の所在を指摘し、それぞれの問題について、フランスの代表が会議においてとるべき政策が明示されている。全文三十ページ、「簡潔と明快の典型といってよいだろう」と、ダフ・クーパーが賞めている。

一八一四年九月二十三日、タレイランはウィーンに到着した。フランス大使館の前には黒山のように群集があつまっていた。
タレイランのほかに、三人の全権使節もついている。ダールベルク公爵、アレクシス・ド・ノワイユ、ラ・トゥール・デュ・パン侯爵である。
ところが、人びとは大して関心を払わない。なぜなら、彼等が単にタレイランのロボットにすぎないことを知っていたからだ。
人びとは、タレイランの馬車に注目していた。そして、扉がひらかれたとき、アッと息をのみ、つぎの瞬間、感嘆のざわめきが潮のようにひろがった。
タレイランは足が悪い。長旅の疲れと、歩行の不自由さに顔をしかめながら、気むずかしいジジイが降りてくると思いきや、水も滴るようなレディがあらわれたからである。
若くて、美しい――というだけではなかった。なんともいえぬ上品さ、優雅さ、そして聡明と

叡智のシンボルのようにキラキラとかがやく青い眼。

その美人のあとから、老人はあらわれた。老人とはいうものの、どこかに脂ぎった精気を感じさせる。美人はよりそって、その手をとった。群集に愛想笑いをしてみせたあと、やさしく、あたたかく抱擁されるような形で、タレイランは歩きはじめ、館の中に姿を消した。途端に、

「だれだろう？」

「美しい！」

というささやきが交わされる。

タレイラン自身は、この美女のことをこう説明している。

「私が大切におもったのは、旧帝国時代のフランスがウィーンの上流社会にあたえた好ましからぬ印象を是正することであった。しかし、それがためには、フランスの大使館をできるだけ居心地よいものにする必要があった。それで、私は自分の姪にあたるエドモン・ド・ペリゴール伯爵夫人にたのんで、とくに来てもらったうえ、錦上に花をそえる役割をはたしてもらったのである。とにかく、彼女の手ぎわと、それから申し分のない頭の働きのおかげで、大勢の人びとがあつまってきて、存分にたのしんでくれた。これはまったく、彼女の賜物だったといわなければならない」

老獪なタレイランは、大事なことをかくしている。それは、この美女の母親がかつて自分の愛人だったこと、そして、芳紀二十一歳のこの麗人もまた、おのれの情婦にしてしまったことだ。

六十ジジイともおもえぬ色好み――だが、その点になると、アレクサンドル一世も、メッテルニヒも、決してヒケをとらない。

というよりは、ウィーンにあつまった連中のことごとくが、いずれも色の道の剛のものだった。

眼をむくにもあたらない。生まれたときから働くということを知らず、最大の関心事は享楽である。ほかにすることはないからだが、その中でも美食と肉欲こそ、特権生活の中心をなしていた。

三

メッテルニヒから、予備的な打ち合わせに参加されたい、という招請をうけたのは九月三十日だ。つまり、到着して一週間たっていた。

その休養の間に、タレイランは美しい姪に手をつけていた。そこでその朝も、随員たちはやきもきしていたが、あえて寝室のドアをノックするものはいない。

十時すぎに、ムッとした顔であらわれた。編んでヒダをとったモスリンのガウンを着たまま椅子に腰をおろすと、八時ごろから待機していた二人の調髪係がさっそく髪の手入れにとりかかる。何十回、何百回とくしけずって、やがてウエーブのかかった形をこしらえあげると、今度は鬘師の番だ。鏡を見せてオーケーが出ると、大変な分量の髪粉をふりかけて彼はしりぞく。つぎの男は手の爪をきり、磨く。つぎの男は足の化粧にかかる。とくに不自由な足の血行をよくするため、バレージュからとりよせた硫黄水をふりかけてマッサージする。水で洗い清め、大きなタオルで拭き上げると、別の男が香水をふりかける。そして最後に、全体の監督をしていたボーイ頭がうやうやしく歩みよって、手ぎわよくネクタイを結びおわると、ようやく身支度がおわり、タレイランは食堂に歩いていく。食卓には山のように花が飾られているが、もっとも美しいのは、すでに化粧をすませ、哀愁をたたえながら待っているマダム・ラ・コンテス・ド・ペリゴールであるということはいうまでもない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.